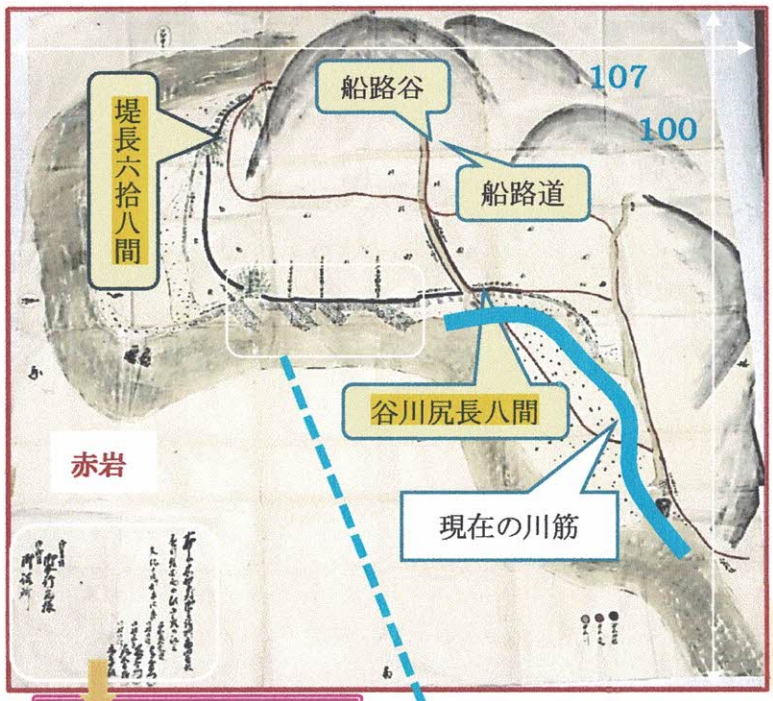
木知原の今昔！

38号：6・5・3

悲願成就 堤が完成したぞ～

大垣戸田藩主は領地に低地が多く、代々河川改修技術を磨き新田開発に力を注いだ。
直接支配地であった木知原も早くからその恩恵を受けてきた。

図面は文化14年（1817年）七代藩主「**戸田氏教**（うじのり）」の世代に完成した護岸工事完成図。“悲願成就”で村人の喜びが伝わるようである。新田の開発も一気に進んだことでしょう。



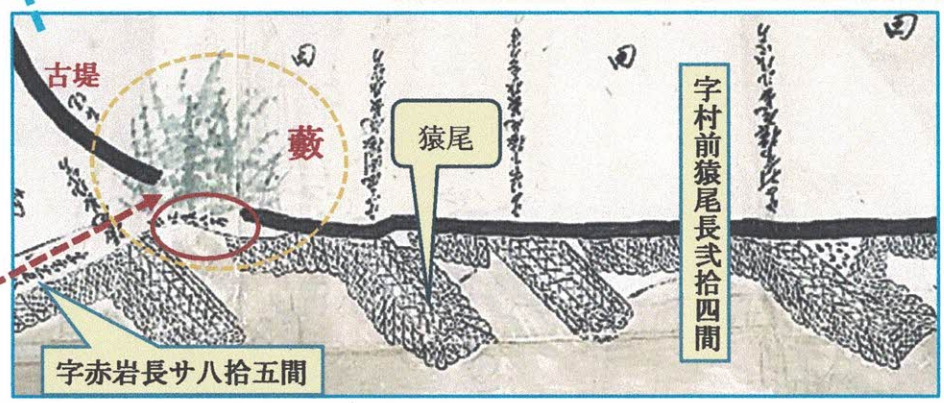
護岸工法は蛇篭の間に猿尾（制水）を随所に設けるという戸田藩開発の最先端の技法がとられている。

猿尾とは、川に突き出た制水用のダシの形が**“サルの尾”**に似ていることからの名称。
谷汲山大橋の下流に猿尾が一本残っていたが工事で埋められた。
（万代橋下流に一本現存）
猿尾は木曽三川工事にみられる固有の工法名で**尾張藩側**の堤防工事に多く用いられていた。
（尾張藩側とは時代を感じる!?）

絵図の「**船路谷・船路道**」との表記は珍しいが今に残る呼名である。

悲願の大工事完成。世が世なら**“もちつり”**ですが、どんなお祝い事をしたのでしょう。

右者木知原村御普請當時有形
墨引絵図面如此御座候 以上
文化十四丁丑年四月
木知原村五人組頭
与左衛門 ㊞
同（三名判形）
御普請 御奉行衆様
御代官 御役所



蛇篭とは竹で編んだへび状の籠に石を詰めて並べる工法の一つ。
増水時に「**籠の隙間に土砂が入り込んで草木が生え自然に堤防を丈夫にする**」と言うすぐれ物で現在も多種開発され活かされている。

大藪が画かれている。江戸末期の絵図には開発されて画かれていないが、なごりとして周辺の水田を「**藪田 or 藪起こし**」と呼んでいたが知る人は少ない？

木知原最初の**共同墓地**がこの大藪の外側にあったと思われる。
古い地図に村中から大藪まで「**赤岩道**」が描かれているのは墓道でしょう。
この墓に立てられていた石碑が現在釈迦弥陀の西側に据えられている。
江戸末期の絵図には現在の共同墓地が右図のように画かれている。

墓の中央部を街道（現存）が横切っている